

子規會誌

陸羯南遺族のことなど

— 没後八〇年のいま —

子規を写した写真師と文士写真家たち

風戸始……………六

霽月宛寒川胤骨の手紙

— 子規顕彰を中心に —

足立修平……………一三

アメリカ加州の小学生英語俳句

和田茂樹……………一七

百濟魚文について

白田三雅……………二三

三二一號

昭和六一年
一月〇月

例 会 記 録

六月例会 (第五二〇回)

昭和六十一年六月十九日 (木) 正宗寺本堂 出

席二十四名

浦屋薫幹事司会により開会。金村治三郎副会長開
会あいさつにつづいて講演。

講演 子規堂を訪れた人びと

田 中 宗 坦

終わって役員会を開き、菊池耕子楼句集『山菜菔』
について協議。

七月例会 (第五二一回)

昭和六十一年七月十九日 (土) 正宗寺本堂 出

席三十五名

浦屋薫幹事司会により開会、越智二良会長あいさ
つにつづいて講演。

講演 極堂と霽月の俳交

足 立 修 平

八月例会 (第五二二回)

昭和六十一年八月十九日 (火) 正宗寺本堂

出席二十五名

浦屋薫幹事司会により開会、越智二良会長あい
さつにつづいて講演。

講演 子規と村上家の人々

森 岡 正 雄

終わって役員会を開き、九月例会における子規
忌法要について協議。

陸羯南遺族のことなど

— 没後八〇年のいま —

川 村 欽 吾

ふと気がついてみると、今月の九月二日は羯南の八〇年忌にあたった。明治四〇年（一九〇七）のこの日が、鎌倉極楽寺の別荘での永眠だったからである。享年五十一歳で、今は遙かな明治も末のことになってしまった。しかし、その在りし日のこともが、何かと憶はれてならない。たとえば、そのころのてつ夫人から笹森儀助宛の手紙である。

残暑きびしく候処、益々御機嫌よくお遊ばされ御目出度存じ上候。此方病人毎々御心配下され有難く御礼申上候。おかげさまにて先々快方にむかひ居り、此分なれば追々恢復出来ル事と存せられ候。御心ニかけ下され御送り下され候梅干誠に有かたく、三種の内しそ巻の赤き方殊ニ病人の口ニかなひ、御陰様にて食事も進み申候。御厚意あつくお礼申上候。早速お礼申上べきの処取込申し、遂々おそなり候段あしからず御くみとり願上候。先ハ御礼申上度。

かして

八月二十三日

陸 内

笹 森 様

(句読点筆者)

これはたぶん、羯南存命中の最後の手紙かと思われる。笹森様

助は、このころ、破乱に富んだ生涯を終え、社会的ないっさいの役目から退いた隠居生活をしていた。弘前長坂町の家でこの手紙を読み、いつもと違ってどこか落着きのないてつ夫人の、一種あせりのごときものを感じとったかも知れない。文中「早速お礼申上べきの処取込申し、遂々おそなり候」など、取込みとはどういうことに拠ったのかと、気がかりになる部分である。これから数日後、九月二日の訃報が伝えられたわけである。

その夏の七月下旬から八月早々へかけての土用の猛暑に、見ろかげもなく瘦せおとろえた羯南の大嗜血があった。東京上根岸の家に留守していた娘たちや、旧日本新聞社・政教社関係の人びとが、驚き大筆して駈つけた。しかし、幸運にも小康をえたので、まずは安心といっせいに引き揚げたのであった。そうした情報に、笹森は津軽の梅干しを見舞いに贈ったのであろう。しかも、これは、羯南にとっては、ふるさと弘前の忘れぬ味覚だったのであろう。その梅干は、現代でもこの土地の風味として承けつがれ、好まれている。

明治三十九年暮れに、鎌倉極楽寺五六一番地の小別荘がようやくできあがると、カヤぶきの屋根だったので羯南は「浦の茅屋」（とまや）

と名づけた。それを聞いて書家の小野鷺堂が、扁額に仕立てて病室にかかげた。いわゆる鷺堂流の瀟洒な文字で、今も葉山の陸家の客間でひっそりと当時をしのぼせている。

さて、そのころ、わずか三問だけのこの茅屋には、夫人が二歳の五十子^{いそこ}をつれ、十八歳の三女いくさんとが看病にあたり、また、お気に入りの下男兵衛やも同居、という毎日であった。そして、病床の羯南は、朝に夕に七里ヶ浜の波音をききながら、ひたすらに恢復を念願して療養につとめていた。

五女ありて後の男や初轍

と、明治三十二年四月二十三日長男乾^{けんいち}一の誕生を、隣家の子規が祝ってくれた。これにこたえて羯南は、

轍買ふて孫祝ふべきを初男

と返句した。その喜びもつかのままで、翌年二月九日、風邪から肺炎を併発して乾一は夭折した。すなわち子規の「悼幼兒」の句、
春浅く乳も涙も水りけり

となった。東京駒込の染井墓地には、立派な陸家のお墓があり、陸羯南之墓の碑の前に可愛らしい小さな「陸乾一之墓」がある。また、その後にはマスへさん（三四年）と五十子さん（三九年）が生まれたので、下谷上根岸の家には、三十九歳のつてつ夫人と五人の娘たちがあった。長女のまさきさんはすでに海軍造船将校東海勇蔵夫人で、次女鶴代さんも中国文学者鈴木虎雄氏（京都大学）に嫁いでいた。

なお、まさきさんの結婚の都合から、夫人の兄今居直吉氏（旧大

阪府立医学校教授）四男四郎氏が養嗣子となった。その四郎氏も医学を修めて、香川県衛生部長などのポストにあった。小さな四郎さんがけなげにも位碑をささげて葬列に加わり、上野谷中の全生庵^{しゅうぜん}まで歩いた。ちなみに、この全生庵は、明治維新の傑物山岡鉄舟の創建にかかる異色の寺で、陸家の菩提寺でもある。また、ついでに言うところの親友加藤恒忠は例の痛風を病み、歩くことができなかったので夫人が代わって会葬した。

さらにまた、いま、四郎さんは八十七歳、数年前から緑内障をわずらい、お気の毒にも全盲になられ入院加療中の由である。健在なのは四女ともえさんと今年九十四歳、夏季は東京牛込のお宅で、冬は温暖な葉山一色の別荘で、しまさん、マスへさんたちとすごされる。子規の諸文にも、隣りの陸家の人びとのかかわりは詳しいが、なかでも数多く登場するのはともえ（巴）さんである。たとえば、明治三十二年十二月の「根岸草廬記事」の一節、

一、去年の暮、虚子が生ける小鴨一羽を贈ってくれたので、^{たらい}盥に入れて飼ふて居た。（中略）隣の主人（注・羯南）の懇望で、今年の元日に隣の池へ放してやつた。我も人の背に負はれて、鄰近往て鴨の羽ばたき幾度となくしては遂に石の上で安らかに眠つて居たのを見とどけて帰つた。（中略）六つばかりになる隣の女の子が遊びに来るたびに「鴨は」といふて聞くと、「居るよ」と答える、「どんなにして居る」と問ふと、「石の上で眠つて居るワ」と軽快な調子で答えるのが常であった。それから二十日ばかりして例の女の子が来たか

ら例の如く、「とも、チャン、鴨は」と聞くと、いつになく波つた調子で「鴨、鴨はネ、泥溝どぼの中へ首突つこんで死んでしまつてヨ」といふ答であつた。

などがあり、また、

午後オ、イク、サン、バ、サン、オシ、サン三人来り西洋ノ廻燈籠ヲマハシテ遊ブ皆鍛茶ノ袴ナリ（「仰臥漫録」・明治三

四年）

とはほえましい情景が眼にうかぶ。

陸家の書庫には、多量の和漢書の他にも、明治中期にしては珍しいほど沢山のフランス本がのこされた。その領域も政経・法学・百科全書から文芸書まですこぶる広がった。明治十二年春、仏学履修二年半ばで司法省法学校から、羯南は原敬や加藤恒忠・福本日南・國分青崖らと共に放校された。しかし、その後も在学中の旧同級生などから、法学校の学習内容などを聞いて、ひそかに闘志を燃やして読書した様子がある。さらに、パリ留学の加藤拓川などの度々の音信も、おおいに刺戟となつたのであろう。没後漢籍などは桂湖村（早大教授）と鈴木虎雄の両氏が選別して京都大学へ、また堅いフランス書は当時東京九段下の組板橋際にあつた専門の堅木屋へ、大八車でたつぷり一台運ばれた。

拓川日記にも「徹宵ソラ翁を読む」といった類の文字があるが、「呈陸実兄」などと署名のテキストが今も遺されているという。その沢山のフランス書を、「誰も読まないというのは勿体ない。」ということ、ともゑさんは、東京府立第一高等女学校を卒業す

ると、さらに東洋仏英和女学校専攻科へ進んでフランス語を修めた。そして、文部省の中等学校教員検定試験仏語科に合格、そのわが国女子の第一号となつた。当時新聞記事として載せられたので広く知られ、さまざまの名士の家庭の子供たちに教えるようになった。たとえば、旧久留米藩主の有馬頼寧伯家や、森鷗外の二女杏奴さんや夏目漱石三女栄子さんなどであつたという。それには名隨筆家の小堀杏奴さんの次のような文がある。

陸家ははじめに書いたようにお母さまを入れると女のかたばかり六人、これは先生（注・ともゑさん）御自身が笑いなから話されたことだが、御用聞きの人が足袋が洗つて干してあるのを見て驚き呆れたという。昔の女の人は白足袋をはいたもので、これが又実によく汚れる。一足で二つあるのだから、一人三足の足袋を洗いに出したとして十八足、つまり三十六の足袋がずらりと干される訳である。

普段は髪の毛一筋も乱さないように、きちんとひさしを出した束髪に結つていらつしやる先生も、時には洗い髪をさつと肩に流して、うす化粧もあでやかにゆかたにくつろいでいらつしやるとなまめいて美しかった。（『陸羯南全集・月

報3』「根岸の時代」②小堀杏奴

まことに練達の文章表現で情景躍如であるが、まったくこんな風であつたらうと思われる。筆者が遺族の皆さんに初めてお会いしてから、もう三十余年になるが、ともゑさんなどは、よき明治の女性のしつけを身につけられて、しかもちゃんとした芯の強さ

をうかがわせる見事さがあった。やがて、昭和四年十一月に、横浜正金銀行常務取締役最上国雄氏の後妻に入られて最上ともよななになった。小堀杏奴さんの文によれば、この御縁も有馬家のお世話によつたとのことである。そして、神奈川県葉山町一色の岡の上のお宅は、もと最上家の別荘だったともいう。格別の庭造りはしてないが、ゆつたりとくつろげるすばらしい芝生があり、一隅に四郎氏夫妻の二階家が新築されてある。

さて次は、大正三年十一月一日付笹森儀助宛、てつ未亡人からの手紙である。笹森は、羯南の若き日親代わりとなって面倒をみて中年からは羯南を通して中央政界の名士を知り、名探険家として東亜同文会囑託となり、日露戦争前夜の北鮮国境からシベリヤ満州方面の実情をさぐつたりした。しかし、今は笹森も七十歳で公職からは離れて、悠々自適の日常であった。

其後は御無沙汰ニ打過ぎ申訳もこれ無く平に御ゆるし下されたく願上候。

扱て此程娘(注・長女まき)事御地へ参り候を幸ひ一寸御訪ね致させ候処、いつもなからますます御機嫌よく渡らせられ候よし洵に々々御目出度深く御喜び申上候。尚又わざわざ東海(注・勇蔵の兄健蔵)へ御越し下され候よしにて結構なる頂戴物ニあつかり、却てまことに恐れ入り申候。山々御礼申上候。娘事は廿八日朝無事帰着致し候ま、憚り乍ら御安心下され度願上候。先は右延引ながら御挨拶申上度此の如く
二御座候。
めでたく かしこ

十一月一日

陸て津

笹森様

御前ニ (「追伸」略)

これは長女まきさんが、夫君東海勇蔵氏につれられて、弘前の牛家に帰省した折のことである。折角の機会だから笹森家へ御挨拶に伺うようにと、てつ夫人の配慮があったことがわかる。ところで、これが陸家の人びとの中で、父羯南の故郷弘前を訪ねた唯一の人となつたらしい。詳しくはわからないが、生前の羯南は「お前たちの行くような処じゃない」と、言っていた由である。

ところで、去る昭和五十一年九月下旬、嗣子四郎氏のたつての懇望で、御夫妻と最上さんの三人が訪れた。親しく津軽の風物に接して感慨をあらたにされた。市内西茂森の禅林街の月峰院墓地を訪ねて祖父中田謙斎の墓前に額つき、かつて羯南顕彰の恩義にあずかった鳴海病院長康仲先生へご挨拶にあがり、格別の歓待をうけた。また、翌日は青森市へ廻つて、羯南の異母弟龍助が養子となつた大山家など、旧縁の人びとと交歓された。

さて、やや前後する不手際となつたが、他界された皆さんに触れておきたい。てつ未亡人は、昭和九年七月二十八日、下谷上根岸八十六番地のお宅で亡くなられた。享年六十五歳であった。その娘たちはそろつて長命であったが、唯一人はなれて関西在住だった二女鈴木鶴代さんは、昭和四十七年七月九日、芦屋市のお宅で八十三歳で逝かれた。さらに、同四十九年七月十四日、三女いくさんが葉山で八十歳の生涯を終えられた。それから一年余りお

いて同五十一年二月八日、東海まささんが九十歳の天寿をまっとうされて、葉山のお宅もいっそう淋しくなった。戦中から戦後へかけて退役した海軍造船少将東海勇蔵閣下とともに、鎌倉の陸家別荘を増築してまささんは暮らされた。敗戦後の同二十二年夫君と永別後は整理されて、葉山の皆さんと合流された。子宝に恵まれなかったので寂しい晩年であったからである。

そして、一番末の七女五十子さんは、同五十五年三月七十四歳で昇天された。彼女ひとりだけがカトリックに帰依していたのだという。だから、現在は、最上さんとしまさん、マスへさんの三人が、静かな老年期を迎えておられる。(昭和六一、九、一五)

(特別寄稿) (陸羯南研究家、弘前市豊原二丁目三三三五)

軍艦千島沈没事件について

正岡子規に「ものゝふの河豚にくはるゝ悲しさよ」という句がある。これは、明治二十五年十二月一日、子規が初めて日本新聞社に出社した日の前日、郷里の堀江沖で軍艦千島が沈没、七十四人の将兵が死亡した事件を詠んだもので、翌日の紙上に掲載された。いはば記者としての子規の初仕事であった。このことについては、全集の「瀬祭書屋

日記」と「俳句時評」に収録されている。

子規の報道に誤りがあるわけではないが、その後巷間に伝えるところに誤りがあると、軍艦千島沈没事件調査研究所(堀江)の松尾忠博氏が、子規記念博物館あての文書で明かにせられた。その要旨は次のとおりである。

1. 鍋木海軍大尉は盲目になっていない。
2. 同大尉はその後累進し、海軍少将になり幸福な生涯を得ている。
3. 千島艦に乗り組みしていた海軍大尉は貴島大尉のみではなく、宮内・岡部の両大尉も乗っていた。
4. 鍋木大尉は正しくは艦長心得であって艦長ではなかった。千島艦長の定員は、艦長を少佐と規定しており、大尉はあくまで艦長心得にしかすぎないのである。

子規を写した写真師と文士写真家たち

アマチユア

風 戸 始

人物写真を主としたいろんな記念撮影に、写真館が大衆に利用されだして百年余り経ちますが、その変遷や歴史、地方への分布の状況は知られていません。いま、その写真の歴史を調べる中で、子規・漱石の写真を写した写真家たちが、その創草期の人たちであるので、子規の写真を中心に、その周辺の人たちのことを話してみます。

写真撮影の年月日や撮影者は、子規の日記や写真の裏書によって時代的に価値があり、年月や場所によって、撮影者不詳であった写真が撮影者の判明したことで写真の歴史に非常に価値ある資料となっております。

写真の伝来

嘉永元年（一八四八）長崎に入港した一隻のオランダ船が不思議な箱をもってきました。「ダゲレオタイプ」という写真機で、写真が初めて日本に上陸しました。

それから人物写真を写す写真場ができたのは、十四年後の文久二年（一八六二）、長崎で上野彦馬（二十五歳）、横浜で下岡蓮杖（四十歳）がはじめでした。

当時の写真代金は、小型のガラス写真で一枚二分（長崎・横浜共偶然同じ二分）でした。一両は四分であるから、高価で庶民のものではなかった。（一両＝四分 一分＝四朱 一朱＝二五〇文）外国との貿易に政府は通貨改革をし、一両は一円に相当したから、大した混乱も起こりませんでした。

私は昔の古い写真を見るのが好きで、松山でも明治時代の写真のうち、今は無い赤松・宇野・長井・中川・その他の腿色した写真、また割合にハッキリした紙写真や、ガラス写真を見たことがあります。しかし、どの写真館が松山の草分けかは判りませんが、年譜によって「子規の写真館めぐり」として一応まとめましたが、写真師不詳の写真も、その後判明したり、またさきほどの松山の写真家にも子規・漱石を写したのあることが分ってきました。漱石の小説「坊っちゃん」の文中に、「ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だろ……」とあります。

私は、東京の一流といわれた新橋の江木写真店で修業したのですが、十五年ほど前に、先輩に丸木写真館ほどの辺だったか聞いたのですが、ドコソコ辺りだけで判然とは分りませんでした。

その後、子規の野球姿の写真(明治二十三年)が、子規全集「筆まかせ」中の「写真の自贊」に、「四月はじめ我写真一葉を大谷子へ送るとて附けやりし手紙也(写真は丸木にて写し、バットと球とを以て運動家の如く写せし也)」と記してあり、ここでも丸木を知り、写真家としての丸木利陽を調べるうちに、下箇蓮杖門下であり、のち漱石を写した小川一真と共に丸木利陽は明治・大正の宮廷技術員であることを知りました。

子規を写した写真家たち

子規の写真で残存している第一号は、明治七年五月、子規八歳、一族の婦女十余人と一緒に道後で写したガラス写真であります。また、明治二十四年七月十六日、帰省中の子規は子供たち数人と道後でガラス写真を写しています。明治二十四年でも、松山地方ではガラス写真全盛が伺われますが、道後の写真館名については資料も記録もありません。布地のバックが使用されているから、テント張りの写真店であったことが想像されます。明治二十六年には、松山ではガラス写真と紙写真が併用されています。(このごろ、明治二十二年、東京上野玉真堂の新聞広告に、紙写真三枚十三銭、大箱入硝子写十銭とあります)。

明治十六年三月、子規は上京を同じくする学友十八名と松山で記念写真を写しています。撮影の写真館は判りませんが、この写真は松山三番町十二番の長井輝正とわかりました。

長井輝正

大正四年、写真材料商の桑田正三郎という人が、還暦と大阪開店二十年を祝して写真師列伝「月の鏡」を出版しました。その中の初代長井輝正は松山に生まれ、二代長井輝正(松山生まれ)は岡山市東中山下で開業して盛業のことが記されていますが、松山でのことは何も書かれておりません。ところが、松山には明治三十年代まで輝正写真館の台紙つき写真がかなり残っています。

写真師のルーツを調べるうち、長井さんの四代目通泰さんが岡山市清心町で今も写真営業を続けられていることを知り、文通の結果、先祖の資料や写真を送ってもらい調べました。初代輝正は小唐人町二丁目十四番地角に写真場を開きました(現在大街道のコダマ写真館の処)。次に明治十二年ごろ三番町十二番(今日の日本銀行から五十メートルぐらい東寄り)に移転。そして、明治二十五年三番町三番地と四番地内一八〇坪に庭のある写真館として新築移転しました(いまの五色そうめんの前)。

子規が学友と写した写真館は、河東静深塾から近い、この三番町十二番の長井写真館と判りました。これは、岡山の長井写真館から送られた数種の台紙のうち、模様が一致しておることから判ったものであります。

子規はこの後、明治十八年七月(母八重と二人)と同二十四年(千舟学舎同窓生と)にこの三番町十二番の長井で写しています(二十四年は二代目輝正)。初代長井輝正は藩籍奉還までお馬廻役の出身であり、子規の父隼太もお馬廻加番(候補という意)で

あったので、維新後も交際があつたかどうかを調べたが、何の資料も現存しておりません。

板写真法（ガラス写真と呼ばれ、鶏卵紙に何枚でも焼付られる）は、一八五四年に英議会で三日間も論争され世界に発表されました。画家下岡蓮杖は、ウンシンから写真機や薬品を高価に譲ってもらったが、撮影法や鶏卵紙の作り方は教えられなかつたらしく、薬を使い果たした蓮杖は、薬の製法に数年間苦労しています。舎密字を学んで、化学から入った上野彦馬とは対照的で、共に文久二年の開業であります。

明治初期における松山の紙写真は、長井のものだけであつたと想像されます。写真の渡来後、各藩では藩主が内密に写真研究を命じていたということです。長井もその一人であつたらしく、藩籍奉還と同時に出した写真場設立の願書らしい古文書が残っているから、愛媛の写真場開祖は長井輝正でしょう。

子規の上京と写真記録

明治十六年六月八日、加藤拓川から上京を認める便りを受取つた子規は、心せくまま二日後の六月十日午後四時には豊中丸の客となつて松山を発ちました（六月十四日朝新橋駅着）。

上京した子規は、勉強のほかは、寄宿先から外出しては付近を見物して廻つたらしく、松山には珍しい紙写真の看板を見て、九月二日と九月七日に、本郷美影堂で、上京後初めて単身で写真を書し、台紙裏面に「四国猿」と記しました。

十一月八日、安永・三並・太田ら四人と叔父加藤拓川の渡仏準備を手伝い四人とも泊り、十一月九日、拓川からもらった吉田（手伝いの小遣いか）で丸木利陽写真館で五人（藤野古白を加え）で記念撮影をしました。

丸木の写真代と一円の価値

そのころ、浅草公園内の紙写真代は、手札判三枚が十五銭〜二十五銭、ガラスのアトム判小型六銭ぐらいでした。そばのもりかけ二銭、下宿代三食付三円五十銭、牛肉コース百六銭、大工手間日当六十銭、花柳界芸者花代四十分（二十五銭〜五十銭）ぐらい（明治二十五年ころまで）。

丸木利陽は、嘉永七年（一八五四）福井市に生まれ、大正十二年（一九二二）一月二十一日没、享年七十歳。当時丸木は、すでに官廷写真師として有名であり、写真代金（東京木挽町の一流写真館玄鹿館で手札六枚一組一円五十銭）は上級代金以上に高かつたらしい。

子規は、叔父にもらつた大金一円を懐に、日比谷旧議事堂前の相馬邸内にある丸木写真館へ、学友四名と共に堂々と玄関を潜つた姿が想像されます。拓川は丸木利陽とかねてからの友人（知人で、渡仏に際し丸木で撮影して出発したかもしれせん。子規は久松藩士の子弟という様度と拓川の甥である誇りをもって、立派な仕上がりも期待して写真場を訪れたと思われれます。

明治二十三年三月のベニスボール姿の子規の写真は、新築（明

治二十二年、芝新し橋角に煉瓦造り二階建て延べ九九平方メートル、当時十五万円を投じた豪壮な写真館）間もない丸木の写場へ野球の服装一式を持ち込んで写した。丸木の写真は同期生の羨望の的となったことでしょう。

明治二十年三月の学生姿全身写真、二十三年十月の制服無帽半身像の写真は、写真師不詳となっているが、出来上がり具合からみると丸木写しの可能性が強いと思います。

丸木は明治二十二年キヨソネ画く明治天皇の御真影を作成。その盛名はますます上がり、大正四年に利陽は盟友小川一真と共に上野美術学校内に写真科を創設しました。開校第一期卒業生の中には、子規会員であった故宇高久敬さんの名前があります。

漱石写真帖（松岡護）には、明治二十四年ごろ富士登山の帰途、中村是公・山川信次郎と三人で初めて丸木で写した写真が出ています。漱石も一流好みであったのでしょう。

旧千円札の伊藤博文像は、明治後期、丸木利陽撮影のものであるが、福井県人もあまり知りません。

以上で丸木利陽のことを話し終わりますと、その後宮廷写真師を拜命した盟友小川一真を語りねばなりません。

小川一真、万延元年（一八六〇）生まれ、昭和四年（一九二九）没、享年七十六歳。明治十七年、米国より帰朝開業。写真撮影のほか、新知識を利用して乾板・製版印刷に着手しました。帰朝の明治十七年七月二十四日の読売新聞に「広告写真燈……銀座三丁目の薩摩屋（岩谷松平）にて四方一丈六尺、地をはなれること

一丈五尺……その消費する油代は一ヶ月僅か二円位」という記事があります。

写真年表によると、明治二十三年、丸木利陽・小川一真と画家黒田清輝の三名が宮廷写真師を拜命しています。

漱石は、明治二十五年、学生服半身を小川一真で写しています。また、大正元年九月、漱石は丸木で三ポーズの半身像を写しているが、その中の一枚が新札千円札となっております。

漱石写真帖には、明治二十五年学生服姿と、大正元年の背広半身ポーズの写真しか載っていないが、漱石には小川一真の写真がかなり残っているそうであります。大正元年の漱石の半身像の左腕には黒の腕章が写っているが、明治陛下の喪に服した漱石の心意気でありましょう。写真帖には大正元年九月とのみ記されているが、次の資料により九月十九日撮影したことが明らかになりました。

行徳二郎は、その兄俊則と共に、漱石の熊本以来の知人である。

行徳二郎年譜（原武 哲『夏目漱石と菅虎雄』昭和五十八年、教育出版センター）によると、

大正元年 九月十一日（水） 佐賀県神崎郡……を出発し東京に向かう。

九月十九日（木）東京に到着し、午後三時半、漱石宅を訪問。漱石不在。やがて漱石帰宅し、「今日撮影したるが、二三に姿勢を変へられ面倒なりし」と言う（写真裏書）（同書三四七ページ）。

「二三に姿勢を変へられ」というのは、三種残っている単独写真であろう。

正面向いたり、首をかしたり、額に手をやったり、写真師はいろいろポーズを付けている。……そこで漱石は「面倒なりし」とこぼしている。たまたまのことであるが、子規が没して、まる十年目の忌日でもあった。……(六十一年一月二十三日古賀藏人氏稿より抜粋)

大正七年写真館廃業の際、小川一真はこの三ポーズの漱石のネガを岩波書店に譲っています。その後も一真は乾板、印画紙の製造に私財を投じたが遂に成らず昭和四年没しました。

鈴木 捷雲 明治十七年六月、郷友森松松南との写真は鈴木捷雲写真師(従来写真師不詳)で写しています。捷雲の兄は清水東谷であります。

清水東谷は、明治十一年吹上御苑内にお写真場を築造して、工成りまさに陛下の御真影を特写拝命していたが、其日たまたま大久保利通公の事変があつて、拝写のことは御沙汰止みとなりました。大久保利通の暗殺は明治十一年五月十四日、午前八時過ぎのことでした。東谷は絵の道から写真に入り、團追と写真の二筋道の写真師でありました。その東谷の弟が鈴木捷雲で、子規がここで写真を写したのは、やはり一流好みだったからでしょう。

三井逸郎 郷友西原義任送別会写真(明治二十二年十月)と伝えられている写真師不詳の写真は、先日柳原正春氏により台紙

付の同写真を発見。撮影は神田淡路町三井逸郎と判明、裏書に「小野為之氏は山から出し村長或は助役の如し、妄言(批評頗る妙)木卯生着する所の衣掌を解剖すれば左の如く也。羽織は富士田一秀生のものにて時は袷の最中なれど憫れにも単羽織、併も木卯生真影を写す間一秀生は下宿にて木卯生の帰宿を待ち居たるなり。着物は岩城之寛氏のもの、木卯生の有に属するものは巾巾の襦袢と尻子帯及び足袋下駄のみ。然れども木卯子は感張れり。兵児帯は大幅の濱縮にて四円餘を出せしなん」とあります。なお、古賀藏人氏の考証によると、

撮影は明治二十年十月である。後列向つて右から二人目の太田正躬が明治二十一年七月東京高商を卒業しているの、この写真の明治二十年十月撮影が裏付けられます。十月とすれば、柳原家の写真の「妄言」の「袷の最中」とも季節が合います。妄言とあるので、極堂翁の自書とは思ひにくい。(古賀藏人氏六十年七月二十五日稿)

片山精三(明治十七年広島開業)

明治二十八年三月三十日、子規は日清戦争従軍記念に久松伯より拝領の刀を持って片山精三で写しています。片山は広島開業以来、軍の撮影を許可されていた有名な写真師であります。

氣賀秋畝(丸木利陽門)

明治二十九年十一月七日、佐藤紅緑送別会の写真を写していま

す。さらに、三十年十二月十四日第一回蕪村忌の集合写真と、別に縁側に腰をかけた子規の写真が残っています。

三宅雪嶺(雄二郎)は当時日本新聞の記者、文士の写真熱が盛んなところで、明治三十一年病床の子規を写しています。この三十一年の第二回蕪村忌には集合写真を写したか、写さなかったか、蕪村忌に出席した子規門人の思い出話によっても、はっきりしていません。写真が一枚も見当たらないのは、写さなかったからかも知れません。雪嶺は明治の代表的思想家の一人です。

時代は飛ぶが、古い写真を探しているうちに元治元年二月二十八日(旧暦)、第二回遣欧使節池田筑後守(二十七歳)一行三十四人のうち二十五人がスフィンクス前に立つ写真を発見しました。そして、首のところに三宅復一(十六歳)という雪嶺の父らしい若侍が写っていました。家系を調べているうちに、雪嶺と妻龍の娘たみの夫が中野正剛であったことも知り、雪嶺の手柄が察せられました。

阪井久良伎(日本新聞記者) 明治二年生まれ、同二十八年子規の歌道に志し、のち川柳に入る、明治三十一年六月十九日縁廻の子規を写す。

赤石定蔵(日本新聞記者)も明治三十三年四月五日、病床の子規を写しています。当時、新聞記者の間でも写真熱が盛んでした(現在は記者がカメラを扱うのはあたり前である時代になりました)。

天田愚庵(五郎)は、子規を写した人ではなく、心の友、文学

の友であります。写真史年表には、明治十三年、天田愚庵、小田原に写真館を開く。ついで父母探索のため旅写真師となり、諸方を行脚、明治十四年、写真行脚しつつ東海道を下り、清水次郎長方に寄寓、のち写真友会を廃す。とあり、写真道は、山岡鉄舟を通じて、江崎礼二の門に入り修業しました(江崎礼二は、明治十一年隅田川で水雷爆発を写し、早取写真師の異名をとる)。

春光堂主人納屋才兵衛は、子規最後の写真を写した人(子規会誌二〇号、古賀蔵人氏稿にくわしい)。明治三十二年蕪村忌の写真と明治三十三年蕪村忌の写真を写しているが、特に三十三年蕪村忌翌日の子規最後の写真となった横向き写真撮影の際、「子規の苦痛」が妹律によって、「撮影者の苦勞」が納屋才兵衛遺族によって語られています。

春光堂は、大正十三年ごろまで子規の妹律や母堂八重の単独の写真を書いています(子規記念博覧館)。

子規・漱石の写真観

子規・漱石ともに一流好み(本物志向)でありました。当時の写真館名は、店名でなく、自信をもって写真師名(作者)を大切にしたことがうかがわれます。現在でも、店名のない写真は、腿色したり消えて保存されていません。

子規は、日本新聞記者となって以来、実写記録として、例えば紀行文の挿絵記録として、半永久的証として事ある毎に写したのでしょう。

明治十七年には、読売新聞に「写真銅版塞戸」（グラビユル・

エッチングラフィック）として広告発表がありますが、子規は新聞には挿絵の必要性を痛感し、不折・為山等を起用したと思われる。また、写真の好みは、丸木利陽を第一として、そのほかは必要に応じて評判のよい信用ある写真師を利用しています。今、写真業界に、写真作品に作者名（店名）のないのがあるのは残念なことでありませう。

漱石は、明治二十五年、すでに宮廷写真師として声名高い小川一真写真場で、学生服で初めて写しています。「漱石写真帖」で見ると、奇麗に修整され、顔立ちも、フックラとした紅顔の美青年の半身像であります。漱石写真帖にはないが、漱石は小川一真で度々写し、上得意であったらしい。写真帖には、このほか九段の長谷川武士、本郷の望月東涯（丸木門）、中黒実写真館等、漱石は気に入りの写真館を選んで注文していたと思われませう。

明治四十四年四月十二日、自宅で医師森成麟造帥郷別宴の十五名の記念写真を写した時も、漱石は本郷の小宮豊隆あてハガキ（四月十一日）に次のように頼んでいる。「……時に写真を記念に撮る積故、望月でも九段の長谷川でも頼んで同刻に連れて来て呉れ玉へ……」。結果は、小宮は下宿から手近の本郷の望月を連れて行った。

漱石の写真観

大正五年八月十八日、福岡久保頼江あて 漱石書簡

「……は一向写真をとりませぬ。普通にとれるとみんながよすぎると申します。有の儘にとれると私の方できたなすぎると申したくなります。まあ、とらないでも生きていられるんだから構はないと思つています。……」久保より江戸明治二十八年愚陀仏庵で漱石にかわいがられた少女。（古賀蔵人氏稿）

「うつしまのうすきあばたや漱石忌」（日野草城）。草城は漱石のどんな写真を見たのでしょうか。

子規・漱石の写真について話してきましたが、写真には記録があつてこそ、一枚の写真から写っている人物の物語りや、わが家の歴史が語りかけてくると思ひます。写真には日時や記念の事柄をちよつと記録してほしいものです。

註 「源流から未来へ目で見ると一〇〇年写真館展」が、二月二十一日（二十六日、東京有楽町マリオン十一階朝日ギャラリー）で開催された。漱石が撮った熊本の富重写真館（上野彦馬の門人）は現存。当時の全紙暗箱が展示されていた。

（昭和六十一年二月例会講演）（松山子規会幹事）

霽月宛寒川胤骨の手紙

— 子規顯彰を中心に —

足立修平

旧治二十八年ごろの霽月の句日記に「逍遙反古」と題するものがあり、その中に霽月の書いた子規一門の俳人を表記したものがあつたが、胤骨の名をすでにその中に見ることが出来、又、同日記の末尾に大阪の水落露石、京都の中川紫明と並んで京都聖護院の胤骨を満月会飯肝煎として挙げているところを以てしても、霽月より六歳も年下の胤骨がすでに俳壇で名を成し始めていたことが察せられる。

胤骨は松山生まれで、松山中学を経て京都第三高校を中退して上京し新聞日本に入社、後「電報新聞」「日本及日本人」「大阪朝日」等の記者として活躍、子規門下として写生文にも力を入れた。子規の晩年には病臥の子規の看病等よく尽くした。子規の歿後、根岸の子規庵保存維持に尽力し、正岡家の面倒をみるとともに、子規全集の編纂、子規遺墨集の発行及び「随放子規居士」「正岡子規の世界」「写生文作法」等を著して子規顯彰につとめてゐる。

子規顯彰に關りのある胤骨の書信を左に抽記してみよう。

◎子規全集、遺墨集の發行について

大正十三年八月五日の葉書に、

暑中御見舞忝く存候。松山在聖人の生活見るが如く覚候。小生子規全集の編纂にて稀代の暑氣を凌ぎ居候。御礼迄。草々。

ふらくゝのゆかめば觸る、秋暑しとあり、ここに子規全集のアルス版が成り、後の改造社版、講談社版の先蹤をなしたのである。

昭和九年十一月十四日の書状には、

却説、今回子規庵保存会に於て子規居士遺墨集刊行に決定仕候。就ては老台御所蔵品を始め、森河北氏并に菅井氏所蔵のものも収載致置度存候。右二氏撮影方認容するやう御話被下間敷や、許容するなら月底又は来月初頭撮影の爲誰か出張可仕候（略）。右宜しく御願申上候。

と要請してきてゐる。

後を追つて又一書、

拜啓、御返事被下難有存候。子規堂も地鎮式に進み候由御尽力多謝候。

遺墨撮影は

菅井氏蔵 中村不折送別和歌半折

貴台御所蔵 卯の花の(略血)書状

森河北氏蔵 南窓倦書記 緑樹參下 金州城外

大内清四郎氏蔵 庭前写生図

等を目ざし居候も、此他猶面白きもの有之候は、写取度存候。書簡も子規居士経歴中に重要性を帯びたるものは写取度存候。出張時日は猶不明に候へ共、定まり次第御知らせ可申上、何分よろしく御願申上候。

その後適当な撮影技士の有無等につき教次の書簡の往復のあった後、単骨自ら来松、露月等の接待も受けて無事予定の撮影を終了して帰京、その礼状として葉書に、

拜啓、帰省中は被厚遇奉多謝候。帰来忙亦繁御挨拶すら不申上欠礼御仁免希上候、書餘譲後鴻候。

と言つて来ている。

ついで昭和十年九月十日付葉書には、
……別便子規遺墨集目錄供高覧候。何卒御同趣へ御推挙給度、よろしく御願申上候。

と売捌きのことを依頼して来ている。

また、昭和十年十二月六日には、

先日御上京の節わざわざ遠く御尋被下難有存候。失礼のみ御仁免下され度、不折君不在なりし由残念の事に存候。

子規遺墨集別送仕候。又御下命の香坂氏へ御送本申上候。御都合可相成、別紙振替に御托被下候は、大幸に存候。送料共合計二部三十六円に御座候。よろしく御願申上候。

こうして遺墨集は出来上がったものの、なかなか売れないものとみえて、十一年九月に又書を寄せて、

却説、乍突然前年御厄介に相成候子規遺墨集愛媛県下に於ける希望者僅に七名に不過、出版元大あきれ居り、且つ残本多く泣込まれ、傍觀も出来ず何とか考慮致度存候。若し県当局市当局等の後援を得て名誉職議員等にて多少引受けてもらふ方法は無之ものによ、甚御迷惑千万に候へ共、郷党の名誉の爲め御高配被下候は、幸甚に御座候。

と訴えて来ている。それでもなお売行き不振であったのか、昭和十一年九月十六日の書簡には、

却説、先日は子規居士遺墨の件にて御高配に預り奉謝候。

小林一茶遺墨井泉水編は目下印刷中なるも、既に郷人信州に於る申込二百を越える旨に有之、然るに大子規の遺墨が郷党の支持者十名に満たずとは如何にも恥ずかしきまゝ、敢て御厄介申出候次第、何卒不悪御仁免被下度候。又三好其他へも趣旨書送付方取計らひ置申候。乍此上何分よろしく御願申上候。

と再三再四郷党の奮起を促しており、その文末には、

子規居士編承露盤、明治時代全句集も是非出版致置度切角努力中に御座候

と承露盤の出版をも志していることを言つて来ている。

◎単骨は、子規庵及子規の遺墨遺品の管理等にも、又正岡家の内間のごとに就いても色々と気配りを示している。

先の昭和十一年九月二日の書簡の中には、

来十九日は大龍寺に於て三十五回忌法要相嘗み、終わって

山水楼に於て精進料理にて生前の有縁を洩れなくふるまふ

旨律子刀自のお話に有之候。万一御上京もあらば御来会被

下度候。

と案内している。

又、後嗣のない正岡家を継ぐ者として、叔父加藤恒忠氏の三男忠三郎氏を入れて後嗣と定めたが、その配遇者の選定の相談に預っている。

昭和十二年二月十四日の霽月宛書状には、

却説、正岡忠三郎君配偶の件につき御高配被下奉謝候。前年末種々物乞の候補美娘山の如く有之候も、悉く本人の氣に召さず、当惑致し居り候。忠三郎氏は恒忠大使の三男、京大経済科出身、本年卅七歳、父伝により酒好、月収百余円、現在阪急百貨店の食器係主任、多少の資産無きにしもあらず。

とこちらの様子を陳べ、当人よりお嫁さんへの条件として、

一 美人 一 性質温良 一 廿二、三歳―廿六、七歳 一 高女卒以上 一 持参金歓迎―これはその説に曰く、

男子大学を卒業する迄多大の資本を費せり、其の上世に出で百円給まで漕付けけるには多大の犠牲を払へり。之が妻とし共同して家庭を作らんとする婦人は又相当の出資（持参金）ありて始めて完全なる一家を生ずべきなり”

とのことに御座候。大体右様の次第御舎の上何分よろしく御願申上候。

と幹旋の労を依頼してきている。

◎雑誌「日本及日本人」との係り

もともとこの雑誌は新聞「日本」と雑誌「日本人」が合体されたもので、東京政教社の発行にかかり、三宅雪嶺・志賀重昂らの政教社同人によって唱導された国家主義・国粹主義の思想及び政論発表の機関であった。子規が新聞「日本」の文芸欄を担当し、日本俳句の本拠となったことは人皆知るところである。その社長兼主幹であった陸羯南は、病気のため明治卅九年六月経営を伊藤欽介に譲ってその地位を退いた。「日本」の伝統と特色との維持を強く望んでいた社員は、新社長の新しい経営方針に不満を抱き、十二月に三宅雪嶺・古島一雄はじめ漢詩人國分青崖、俳諧における河東碧梧桐ら旧社員のほとんどが連袂辞職し、雪嶺の主宰する「日本人」と合流して「日本及日本人」と改題、新聞「日本」、雑誌「日本人」の精神を踏襲、子規門下の碧梧桐・鳴雪・兎骨も俳句欄を担当した。

子規門下の五百木飄亭もまた明治二十八年「日本」に入社、後に政教社の経営を担当し、昭和四年から約十年「日本及日本人」を主宰したが、その飄亭も病歿すると「痛惜に不堪」と嘆き、「日本及日本人今後如何相成行くか、これのみ憂慮致居候。

伝統的日本精神の支持者なく、寧ろ商品とする位ならば、此際決然廃刊、花と散る方よろしきかなど考へ居候。何分御声援よ

ろしく御願申上候。」と廢刊瀬戸際の窮状を述べ、昭和十二年七月十七日にも「政教後任面倒にてよわり候」と述懐している。大東亜戦争に突入した日本は、その緒戦の華々しい勝利も空しく、国家総動員体制のもと、言論の統制の時代に入り、諸事すべて不自由時代となる。

昭和十九年七月十七日の葉書には、「力を盡しての戦争も敗色濃厚となりしも、尚國民の士気を鼓舞すべく朝野共に苦斗、雑誌出版も意に任せず」と述べ、又、十九年十二月一日の来信には、「日本の百姓も大工も戦ひに勝ち居り候へども、ひとり科学陣の敗れ居ること今後に注意すべきこと、存候。此事客年末老兄の絶叫せられし所なるも、科学は一朝にして泥縄的に発達せしめざることを残念に存じ候。政教社も時節柄印刷及用紙意に任せず、苦心致居候。御賢察願上候。」と結んでいる。

昭和二十年四月五日の葉書には子規庵の焼失を報じて、子規庵焼夷の災に罹り候て、此身却て生存せしこと残念、無申訳御座候。」

とあり、柴田泰助の葉書には「単骨先生は上根岸一二五書道博物館内に落着」と単骨の落着先を報じて来ている。

避難所に落着かずして春惜む

と端書には書き添えている。が、さもあらんと同感させられる。さらに、昭和二十年十月九日の書状には、「マ司令部の鼻息荒く、政教社も右傾団として、解散を勧告せられ候。我等は当初の勧告を容れず邁進仕るべく候。腹は復活に決定致居候も、資

金少くも二万を要し候。先般来其才覚に疲れ居候」とあり。同年十二月十八日には「連合国管理下に在りと雖も皇國民は精神を失はず、旧衣を脱却せず、祖先以来長き歴史の文化を失はぬやう工風を要するの時と存候。「我流」と改題し、意気を新にして発行仕り度く存じ其の計画を進め居り候処、近衛公の自決せられ、同志、社友多数の逮捕となり、経済関係も意の如くならず延引致し居り候。誰か二万円だけ貸して呉れ手のなきものや、と奔走中に御座候。事情御賢察希上候。」と時節柄資金調達の困難を訴えているが、どうにかして子規の衣鉢を伝えんとする気持が行間に沁み出ている。

翌昭和二十一年一月十一日の封書には、

老僧不在葛藤裡、万世の平和に沈む海単哉、海単として沈み、海月として浮き出ずるを欲せず、如何とも致し兼ね、拙者所持の子規書簡二通表装せるもの一万金にかゆる義人なく候や。

今やマ支令部の指令類、如何、日本文化次第に蚕食せられんとす。私の流風を維持し、米人に俳味、茶味、禅味を味得せしめ、彼我融合、世界平和、皇國安存に努力致度存候。是豈閑葛藤ならんや、敢て老台の高慮を煩す所以也。

霽月老台

陽光

冥目叉手 問子規靈 空中有声 善哉々々

(P 22へつづく)

アメリカ加州の小学生英語俳句

和田茂樹

「俳句の国際化と松山」をテーマにしたシンポジウムが、この

秋十月二十五・六日に、子規記念博物館で開催されることになった。が、はたして俳句は国際化されるかどうか、俳句が海外でどのように享受されているか、すでに諸家によって論議されているが、自分の眼で確かめたいと思っていた。

偶々、第六回訪米団に参加、サクラメント市を訪れる機会に恵まれた。松山市と姉妹都市という友好関係も幸いして、句作を楽

「加州毎日新聞」昭和六十一年一月一日

新年俳句 常石芝青蓮

天 宮崎笛人

米ソ間暗雲うすれ年新た

（評）世界万民の要望して居る米ソ会談が順調に進んで居

る事を暗雲うすれと表現して居るのは巧みである。
時局を扱った俳句として上乘の秀句である。

地 利根里志

実年に心華やき屠蘇を酌む

人 太田悦子

瑞雲の際にはほのぼの初明り

人 セリグマン・アーウィン

碧眼の賞つる日本画初曆

（評）欧米人の眼に止まった見事な日本画の初曆を美し

いなと賞讃し素直に表現した俳句。

佳句 セリグマン・アーウィン

衛生に結ぶ人心寅の春

「地」「人」の日系人の句評は省略した。米ソ間の国際関係

山市衣山の生れ、東
迎を受けたし、同席
じめ、諸資料を頂い
かれたので、これが
ることとする。
は、海外でもいち
から「ホトトキス」
彼の歴史的な発展経
メリカ人の俳句と、
四示しておこう。

ろしく御願申上候。」と廢刊瀬戸際の窮状を述べ、昭和十二年七月十七日にも「政教後任面倒にてよわり候」と述懐している。大東亜戦争に突入した日本は、その緒戦の華々しい勝利も空しく、国家総動員体制のもと、言論の統制の時代に入り、諸事すべて不自由時代となる。

昭和十九年七月十七日の葉書には、「力を盡しての戦争も敗色濃厚となりしも、尚國民の士気を鼓舞すべく朝野共に苦斗、雜誌出版も意に任せず」と述べ、又、十九年十二月一日の來信には、「日本の百姓も大工も戦ひに勝ち居り候へども、ひとり科学陣の敗れ居ること今後に注意すべきこと、存候。此事客年末老兄の絶叫せられし所なるも、科学は一朝にして泥縄的に発達せしめざることを残念に存じ候。政教社も時節柄印刷及用紙意に任せず、苦心致居候。御賢察願上候。」と結んでいる。

昭和二十年四月五日の葉書には子規庵の焼失を報じて、

子規庵焼夷の災に罹り候て、此身却て生存せしこと残念、
無申訳御座候。――

とあり、柴田泰助の葉書には「単骨先生は上根岸一二五書道博物館内に落着」と単骨の落着先を報じて来ている。

避難所に落着かずして春惜む

と端書には書き添えている。が、さもあらんと同感させられる。さらに、昭和二十年十月九日の書状には、「マ司令部の鼻息荒く、政教社も右傾団として、解散を勧告せられ候。我等は当初の勧告を容れず邁進仕るべく候。腹は復活に決定致居候も、資

金少くも二万を要し候。先般來其才覚に疲れ居候」とあり。同年十二月十八日には「連合国管理下に在りと雖も皇國民は精神を失はず、旧衣を脱却せず、祖先以來長き歴史の文化を失はぬやう工風を要するの時と存候。「我流」と改題し、意氣を新にして発行仕り度く存じ其の計画を進め居り候処、近衛公の自決せられ、同志、社友多数の逮捕となり、經濟關係も意の如くならず延引致し居り候。誰か二万円だけ貸して呉れ手のなきものにや、と奔走中に御座候。事情御賢察希上候。」と時節柄資金調達の困難を訴えているが、どうにかして子規の衣鉢を伝えんとする氣持が行間に沁み出ている。

翌昭和二十一年一月十一日の封書には、

老僧不在葛藤裡、万世の平和に沈む海胤哉、海胤として沈み、海月として浮き出ざるを欲せず、如何とも致し兼ね、拙者所持の子規書簡二通表装せるもの一万金にかゆる義人なく候や。

今やマ支令部の指令頻、如何、日本文化次第に蚕食せられんとす。私の流風を維持し、米人に俳味、茶味、禅味を味得せしめ、彼我融合、世界平和、皇國安存に努力致度存候。是豈閑葛藤ならんや、敢て老台の高慮を煩す所以也。

陽光

霽月老台

冥目叉手 問子規靈 空中有声 善哉々々

(P 22へつづく)

アメリカ加州の小学生英語俳句

和田茂樹

「俳句の国際化と松山」をテーマにしたシンポジウムが、この

秋十月二十五・六日に、子規記念博物館で開催されることになった。が、はたして俳句は国際化されるかどうか、俳句が海外でどのように享受されているか、すでに諸家によって論議されているが、自分の眼で確かめたいと思っていた。

偶々、第六回訪米団に参加、サクラメント市を訪れる機会に恵まれた。松山市と姉妹都市という友好関係も幸いして、句作を楽しむ上野安子さん一家の出迎えをうけた。松山市衣山の生れ、東雲学園の出身という地縁もあり、心からの歓迎を受けたし、同席の三谷芝篤さんからも、現地の各俳句会をはじめ、諸資料を頂いた。その中に小学生の英語俳句もあり、心ひかれたので、これが生まれるまでの状況や現状などについて述べることとする。

アメリカの西海岸カリフォルニア州(加州)は、海外でもいち早く俳句が導入された地域で、大正五年前から「ホトトキス」誌に投句しはじめるほど愛好者がいた。その後の歴史的な発展経過については、別に略述したので、今回はアメリカ人の俳句と、俳句の英訳と、英語俳句(HAIKU)など例示しておこう。

(一)新聞俳句欄と選者常市石芝青

「加州毎日新聞」昭和六十一年一月一日

新年俳句 常市石芝青選

天

米ソ間暗雲うすれ年新た

(評) 世界万民の要望して居る米ソ会談が順調に進んで居る事を暗雲うすれと表現して居るのは巧みである。時局を扱った俳句として上乘の秀句である。

地

実年に心華やき屠蘇を酌む

人

太田悦子

瑞雲の隙にはほのぼの初明り

人

セリグマン・アーウィン

碧眼の賞づる日本画初暦

(評) 欧米人の眼に止まった見事な日本画の初暦を美しいなと賞讃し素直に表現した俳句。

いなと賞讃し素直に表現した俳句。

佳句

セリグマン・アーウィン

衛生に結ぶ人心寅の春

「地」「人」の日系人の句評は省略した。米ソ間の国際関係

に注目し、新しい「実年」の用語を取材、また米人にしてなお日本画の趣味、寅の春など、日本語を駆使した俳句（「佳句」は四十八句中の一）のあることに注目したい。

選者吟（三句中） 芝青

初日拝む日米親和祈りつつ

数え年白寿自祝の屠蘇を酌む

「選後感」中に、「加州毎日新年俳句の選をする様になって、既に二十年余になる」が「老生はアメリカの俳句を今後も出来る丈盛大になる様に微力を捧げたい」と述べている。

選者、常石芝青は明治二十一年高知県野市町に生れ、本年九十八歳、数え年「白寿」（九十九歳）の老齢でなお、新聞の選も二十余年、それ以上に加州の各俳句会の選者も務めている。こうした気がどこから生まれたのであろうか。

県立高知二中卒業、翌明治四十年渡米、共同経営の農業をはじめ、大正十年桑港（サンフランシスコ）日米新聞懸賞俳句に天賞を得たのが契機となって、生涯俳句に精進、同十二年羅府（ロサンゼルス）に「たちはな吟社」を創立し、三年後には俳誌「たちはな」を主宰、昭和十七年第二次世界大戦となり、強制立退令により収容所入りと決定。米大陸中央を横断するロッキード山脈のある寒冷地ワイオミング州に三年半の収容所生活を送った。この収容所生活中一日も欠かすことなく句作を決意し、自製の句帳を携え、六千数百句を認めるとともに、ハート山吟社を結成し、自らは句集『配所の月』まで謄写出版している。収容所入りの逆境

を、千載一遇の好機と一変させたその人生観が、生涯を通じてその基底にあったことが、収容所生活中の本句集に詳細に記されている。

この間、英詩人安田蕉村（二世）の刺激をうけ、英詩邦訳を試みたことから、英語を日常語とするアメリカで日本語ばかりの俳句を作っているのは駄目と痛感し、俳句のローマ字化、さらに英訳を試み、昭和二十三年俳誌「たちはな」を再刊するや、これに掲載していった。

フレスノ大学で、少数民族の文芸集教科書を編著したさい、俳句を求められたが、日本語の俳句は載せず、英訳した芝青の俳句のみ採用したという。「たちはな」誌に掲載以後のことであろう。よって、芝青の試みた俳句のローマ字化と、その英訳俳句の一部を例示しよう。

(一) 俳句のローマ字化から英訳俳句へ

① 安らかな稚児の寝顔や合歡木蔭

女子

Yasuraka na Breathing peacefully

chigo no neiki ya a toddler sleeping in the

nemu kokage. shade of the silk tree.

Yasuko Ueno

② 混血の娘ははにかみて屠蘇を受く

剛子

Konketsu no Half blooded daughter

ko wa hanikami te has bashfully accepted

toso o uku. the New Year's sake.

Noriko Chapman

③民族の礎石となりぬ秋深し

芝青

Minzoku no

You've become one of

soseki to narinu

the corner stones of our race.

aki fukashi.

Ah, autumn cool day!

Shisei Tsuneishi

俳句の上5・中7・下5を意識してローマ字三行書とし、これに対応して、英語俳句も原則として5・7・5音節とするよう試みた。しかし、①の二行目の最後にtheがあるのは17音節にあわせるための処置だが、冠詞と名詞と別行にすることは適切ではない。これは日本語と英語の語構成の相違に起因している。ただし、「暑熱」はワインでは感じがでないので、正月用の「酒」と、日本語の発音を生かしてローマ字化している。

(三)英米人の俳句の英語訳とHAIKU
英米人の俳句の英語訳の一例をあげよう。

「古池や蛙飛びこむ水の音」をローマ字一行書きとして

The old pond: 1111 (1)

A frog jump in, - 1111 (2)

The sound of the water 11111

(R. H. Blyth 訳)

フライスの訳は、昭和二十六年版「HAIKU」に拠った。昭和五十年再版本同じ。右側に音節数をあげたが、十二音節の直訳

では、情景描写が適切に表現されないので、感覚的な語も補った英語も試みられた。

An old silent pond 1121

A frog jumps into the ponds, 111211

splash / Silence again. 122

(Harry Behn 訳)

「水の音」は splash などと意識されてはいるが、5・7・5の十七音節に整えられている。フライスの翻訳よりも、ヘーンの方が、米人にはより実感を感じしえられるのであろうか。また英語では韻を重視しており、pond と脚韻の重なりにより快調を感じているとも思われる。

アメリカのHAIKU協会ではHAIKUについて、適切な定義を下している。

(1)自然と人間性がかかわる際のするどく認識された瞬間のエッセンスを記録する無韻の日本の詩。通例十七字音(日本語のシンボル音)

(2)①の外国の応用。通例5・7・5音節。

とある。俳句の本質を的確に把握し、「無韻」に英語との相異点を指摘しているところであろう。

しかし、十七音節に定めてしまうことは、ローマ字俳句英語訳の①の二行目の最後に冠詞theを置くような例も生じており、また十七音節より短い音節の方がHAIKUに適当だという意見の詩人が多いともいえる。単なる自由律三行詩の短詩型HAIKUには、

日本の自由律俳句に通ずるものがあるからである。

(四)加州小学校生の英語俳句

モントレパーク市は那智勝浦市と姉妹都市となった。この機会に、同市小学校生に懸賞俳句を課し、常石芝青はその選者となった。懸賞俳句には六校(その後七校)が応募したが、すでに十六年に及んでいるという。

三月二十三日モントレパーク小学校(七校)の小学生俳句発表会における入選俳句のコピーがある。四年・五年生一人一句で四四九句あり、その中、四年・五年各入賞三句、佳作一〇句を掲げている。「過去十二年間、私はその選」と記されているので、昭和五十七年の作と強われる。

○モントレパーク小学校五年生英語俳句

First Prize (1等賞)

Through the crack of snow

sweet, crisp daflodills emerge

in the morning breeze.

Romy Han Age 11 (生徒名・年齢)

Macy Intermediate School (小学校名)

Mrs. Favilla (指導教官名)

雪の割れ目から／香りのよ／新鮮なフッパ水仙が顔を出す／朝のそよ風の中で／の穂ぶさ／。十一歳の小学生 HAIKU (ハイク)である。一見自由律三行詩の観があるが、一―一―一―一―の音数律である。英語の
11132 / 1121 / 5.7.5の音数律である。英語の

韻はないが、日本語の五・七・五の基本型と一致し、アメリカのハイク協会でのハイクの定義(2)、「外国の応用。通例5・7・5音節」を守っているといえよう。芝青は俳句をローマ字三行句とし、英語俳句を試みたが、このこともハイクも、雪間から芽を出した水仙を見て、植物の逞ましい生命力に驚き、「自然と人間性のかかわりの瞬間のエッセンス」を十七音律に表現している。

Second Prize (2等賞)

Hot, arid desert

can't stop the night camels

walking slowly on.

Ernest Wong Age 10

Brightwood School

Mrs. Mittelstadt

熱い、乾燥した砂漠は／力強いラクダを止めることもできない／ゆっくりと歩き続けて／の意。122 / 21112 / 221 / 5.7.5の音数律で、不毛の砂漠だが、ゆっくり歩く力強いラクダの歩みを止めえない、異色の夏風景を表現している。

Third Prize (3等賞)

Oh, pretty roses!

You bloom in summer with joy,

gracing my garden.

Jennifer Marcogliese Age 10

Repetto School
Mrs. Schroedle

おん、可憐なバラよ／＼夏には喜んで咲く／＼庭を美しく飾つて
の意。1 2 2 / 1 1 1 2 1 1 / 2 1 2 / の 5・7・5、計十七
音節である。庭のバラの開花を賞賛したこともうぶな感情が表
われてゐる。

HONORABLE MENTION (選外佳作)

In the cool, soft wind
kites with all colors and shapes
twirling in the air.

Jennifer Hamamoto Age 11
Macy Int. School
Mrs. Fawilla

涼しい、さわやかな風に／＼凧はとりどりの色や姿とともに／空
中でクルクル廻りながら／と、凧上げ風景を点描した。季節はいつ
ただろうか。

Long and colorful
a bridge across the blue sky.
Look at that rainbow /

Jeanie Shen Age 9
Hillcrest School
Miss Callaghan

長くて多彩な／碧空を横断する橋／あの虹を見よ／の意。空に

かゝる色とりどりの美しい虹に眼をうばわれた感嘆の詩である。
空中の凧の動きや、虹の美など、空にそそがれたことも眼に
映じたハイクのみを掲げたが、選外佳作の他の題材(季)をあげ
ておこう。

春咲きはじめてたバラ(夏)、囀る鳥や花に春を感じ、明るい陽
ざしに円を描いて廻るトンボ(秋)、癡猛な熊(冬)が走ってい
る兎(冬)を追うようにいちはずやく逃げる鹿(秋)、山に雪降り
雪達磨(冬)を作ることもら、陽の上るにつれて融けてゆく雪達
磨、冬の夜夏の日の夢を見ての驚き、明るい春日に喜んで遊ぶ子
らの日没後の悲哀感など、植物・動物とこともの遊びや感情を詠
みこんでいる。

原則としての三行詩十七音節を守っており、季語については
「沙漠」など、この句からは夏とすべきであり、大陸の独自なも
のも生まれるであろう。ただ、日本語と文の構成、語構成がちが
っており、意味内容も多義にわたるものもあり、的確に鑑賞しえ
ただらうかと不安が残っている。

しかし、芝青選小学生英語ハイクは、すでに十六年も実施され
てきている。しかも、日本の俳句が語構成の違う英米人にも韻不
用の短詩として活かされ、また自由律のよい最短の詩に表現され
て来たことは、問題点がないではないが、俳句の世界文学への可
能性を如実に示しているといえるであろう。

アメリカ加州の小学生の間に、HAIKUが普及し、約四五〇

名も心算するにいたったことは、俳句の国際化への第一歩であり、その功績の一斑は、常石夢青翁の信念に基づく指導と熱意の賜といえよう。「民族の礎石とならん」との決意は、青少年の世代に実践され、太平洋の架橋としての意義を思い、改めて翁に敬意を表する。

資料を頂いた三谷夢薫・上野安子さんに心からお礼申しあげた
い。

(注) 拙稿「米国カリフォルニア州の俳句(二)」(「星」昭和61

年6月)は前半は共通だが、四年生の俳句を掲示。

(昭和61年4月29日松山子規記念博物館において)

(昭和六十一年四月例会講演)

(松山子規会副会長)

(P 16よりつづく)

破産状態にあった霽月にしては、右様の要請に対して応じ得るすべもなく、ことに死の直前の病床にあっては奔走の力さえなく、「日本及日本人」の復活は昭和四十一年一月を俟たねばならなかった。

(昭和六十一年三月例会講演) (松山子規会幹事)

(P 31よりつづく)

二十三回忌詣でし子規忌なればせひ

糸瓜忌や弊衣蓬髪差らはず

玄関の仏海想ふ子規忌かな

雨の秋句碑を包めり獺祭忌

糸瓜忌や霖雨の中の墓前祭

みな誰も句を詠むよるへ獺祭忌

岩の間の水にしづめる粟をさへ寂しき

おもひに君しぬびあつ

村上 和鴻

森 緑葉

山本耕一 路

和田 沙子

同

渡部 春江

弘田 義定

(五十首順)

百濟魚文について

白田三雅

一 はじめに

江戸中期の俳人で、豪商であった百濟魚文については、多くの先学が論及せられている。それは、伊予史談で次の通りである。

70号 昭和七年八月 曾我部松亭

「小林一茶の松山再遊について」

71号 同 七年九月 曾我部松亭

「百濟魚文」

77号 同 九年三月 曾我部松亭

「蕉翁門人 久松肅山」

78号 同 九年九月 景浦雅桃

「俳人一茶と伊予」

140号 同 三十年五月 柳原多美雄

「百濟魚文の旧宅」

178号 同 四十年八月 星加宗一

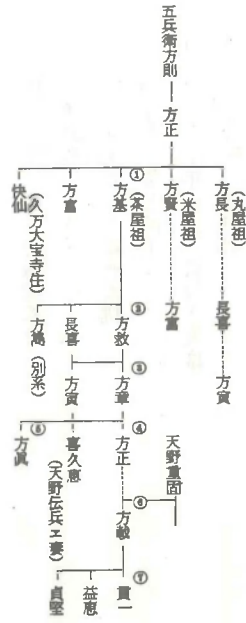
「樗堂 魚文 兔文の出家年譜」

なお、このほかにもあると思われるが、その作品もあまり伝わらず、墓碑も現在不明という状態である。図らずも先般発見された百濟家文書に、若干の推測を加え、魚文の生きざまを見ながら、更にその系累にふれ、交友をさぐることによって、子規山脈の基底をなした、江戸中期以降の俳脈を考えるよすがとなし、あえて、ここに拙文を草してみる次第である。

二 家系

前記の諸論には、家系にふれたものはなかったが、今回発見された百濟家文書のなかに、系図が三通伝来している。その一は、百濟王敬福を出自とするもの、その二は、魚文の曾孫、武知五郎造が正したもの、その三は、最も古筆の略系である。このうち、第一は、前記五郎造が、「五兵衛方則より以上はみなうそじゃ」と記しているので、ここでは、第二によってみることにする。(図1参照)

図1 武智氏(百濟氏)略系



初祖、五兵衛方則は、大洲領三谷(現伊予市三谷)に生まれ、万治元年(一六五八)没。二代、五兵衛方正は松山城下へ出て、丸屋の祖となり、貞享四年(一六八七)没。その長男方長は丸屋を継ぎ、次男方賢は、志津川米屋の祖となる。三男方基(吉右衛門)、享保十八年(一七三三)没、は茶屋をおこした。これが魚文の祖父である。

茶屋二代、方教は五郎兵衛・権六・新九郎・吉右衛門と称し、明治九年(一七七三)五十九歳で没した。この時代に財を大きくしたようである。

三代を継いだ方章は、初め市之丞、吉蔵と改め、吉右衛門と称し、のち、姓を武知より百濟と改めて、方猷、字は伯図、孔雀楼・青眼室・六六亭・魚文と号した。また、薙髪して招隠室と号し、宗栄と名乗った。延享二年(一七四五)五月八日に生

まれ、文化元年(一八〇四)十月二十五日六十歳で没した。

四代、方正は、市之丞・五郎兵衛・五郎藤と称し、基則と号す。安永七年(一七七八)―天保七年(一八三六)、五十六歳没。

五代は、方正の弟方真が継ぎ、三之丞・新九郎・五郎造といひ、弘化四年(一八四七)六十六歳没。

四、五代に子になかったため、天野十八郎(後述)の子方載(朔太郎・五郎造)が六代を継いだ。彼は、天保四年(一八三三)に生まれ、明治四十三年(一九一〇)七十八歳で没した。

系図にはその子貫一になっているが、彼は父より早死にしたので、その後は、精一氏が継いでいる。

三 環境

魚文の生を享けた、延享から文化という時代は、商人が力を蓄えたときであり、彼の生家、茶屋は、松山でも三本の指に屈する豪家で、松平藩、大洲藩にたびたび献金をし、かつ、松平藩の貸方役もつとめ、藩主在国ときは、かならずお目見え、流盃の事があり、大洲藩主より接待されたときの御馳走の目録も残されている。今、それを証する記録の一、二を記して置く。

一 貸方役申達書

古川屋次兵衛

茶屋吉蔵

布屋次兵衛

町方一統、銭札不自由之趣相聞候に付、其方共々通用手形質
銭札場所に差替候は、二俵に付、七拾目貸之積ヲ以、銭札相
渡可申候、委細之儀者、右場所御用掛御勘定共江承合可申候、
尤貸方之儀者、不當無之様、万端入念引請相勤可申候、

二 借用証文

借用申米之事

合式拾俵者 [] 之米也

右者、式割七年賦之捨定借用申処美正也、来寅暮々申暮迄、
七ヶ年之間、割合之通四俵宛毎暮返済可申候、万一滞候者、
致御代官所、三津渡米之内御引押被成候而御請取可有之候、
其節何茂申分無之候、為後証如件、

天明元丑年十二月

借主 吉田久太夫 印

加判 戸田太左衛門 印

このような、御達書や、証書類など、数百通も残され、当時
の経済界で懇切な世話をしたことが偲ばれる。

四 教養

このような豪家に生まれた魚文は、年少から、遊芸を好んだ
ようで、太鼓・つづみ・横笛・漢曲等を買ったとみえて、伝書
類も多い。さらに、蹴鞠・香道にも精しく、茶道は、裏千家九
世、石翁玄室に学んで奥儀を極め、それとともに、茶室や造庭
まで研究した跡がうかがえる。さらに、俳諧は、二六庵竹阿に

入門し、多くの友と交わり、「俳諧こまさらえ」を残している。
また、明月和尚に親近して詩も学んだらしく、宇佐美淡斎とも
ゆき来している。今残された書抜きや書写本、伝書などに彼の教
養の深さを感じさせるものがある。

五 交友

魚文は、茶の湯・俳諧をたしなみ、音曲・詩歌を好み、多芸
多才であったので、交友に恵まれていた。今、それを、俳諧、
その他に分けてみることにする。

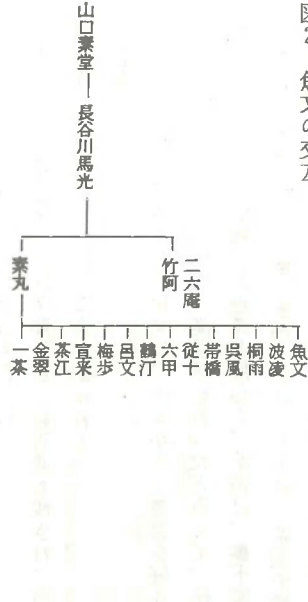
俳諧は、図2の系譜のように、葛飾派の二六庵竹阿に、明和
七年（一七七〇）入門している。竹阿は、宝暦十三年（一七六
三）に来遊し、獅子門系の人々と交流しているので、或はその
つながりに依るのかも知れない。事実彼と共に入門した人々に
その系列の人が多く、以下略伝を掲げる。（図2参照）

(1) 二六庵竹阿（一七九〇）北窓庵竹零とも号す。江戸の人。
長谷川馬光（素堂門人）門。『続五色墨』『松の容』『古袋』
編著。葛飾派。宝暦十三年支考三十三回忌、明和七年、安永
四年、天明元年の四度来遊。大阪住。

(2) 小林一茶（一七六三—一八二七）通称弥太郎、名は信之。
圀橋・雲外・亜堂・阿道・菊明坊・蘇生坊・二六庵・俳諧寺
と号す。信州に生まれ、竹阿に学び、諸国を巡る。寛政七
年、八年の二度来遊。晩年故郷にて六十五歳没。

(3) 桐雨 松山人、宝暦十三年、竹阿に入門。

図2 魚文の交友



- 有田 友之 蝶化
 五水 志水 馬涼
 吳律 非石 芦冠
 岡田 冬陽 栗田 櫻堂 深山 菊翁 貝素 貞素 百吾
 雨琴 無来 門屋 麥士 松田 方十 小倉 蘇郎 魯人
 涼雨 蛙膚 不二 羊求 字好 涼字 村山 可興 樽露
 盧堂 花笛 雷主 字好 一來
- 吉田 藏沢 宇佐美 俊齋 明月 徳成 藏山
 千宗室 曾我部 一貴
- (1) 蝶化 魚文の友。
- (2) 友之 有田友右衛門、獅子門、鳳枝井連、風早の人。
 『きさらぎ』、宝曆文化ごろ。
- (3) 吳風 松山人、紅女の父。
- (4) 馬涼 同右、明和ごろ、鳥酔庵。
- (5) 文甲 同右、木村治五兵衛光信、明和五年竹阿と交わる。
 安永六年、六十一歳没。布屋。
- (6) 茶江 同右、明和ごろ、五雲門?。
- (7) 百吾 同右、五雲門。
- (8) 扇峨 同右、魚文の友。
- (9) 五水 同右。
- (10) 志水 西条、『友千鳥』寛政。
- (11) 芦冠 松山、『こまさらえ』、文化ごろ。
- (12) 貞素 寛政ごろ。
- (13) 魯人 松山、寛政ごろ、『こまさらえ』。
- (14) 吳律 同右、魚文の友。
- (15) 非石 久万大宝寺齊秀意温。市坪池内久左衛門の子。宝曆九年五十八歳没。
- (16) 深山菊翁 大阪、獅子門、有中法師の弟子。寛政三年交わる。
- (17) 貝叟 松山、明和ごろ。
- なお、詳伝のある友人に次の人々がいる。

(1) 小倉蘇郎 (一七九九) 松山、茶屋長次郎正信、祖郎とも号す。寛政五年霜夜塚墨入れ。

(2) 岡田冬陽 (一七八二) 松山藩家老長沼氏臣、岡田左次兵衛。

(3) 栗田樗堂 (一七四九一八一四) 廉屋与三左衛門・専助・貞蔵と称し、政徳、政範といい、蘭之・息隠・二畳庵と号す。加藤晧台門。六十六歳没。

(4) 樋口従十 (一七一七一七八) 松山藩士、次郎左衛門と称し、如其庵・半日庵と号す。

(5) 門屋麦士 生没年不詳。文化七年『今はむかし』に追悼記あり。松山藩士。祐助といい、「うつゝ庵」と号す。

(6) 松田方十 (一七五〇一八一六) 唐津屋次郎左衛門、諱は信得、含芽の子、五粒と号す。六十一歳没。

(7) 村山可興 (一七一六一七九七) 四郎右衛門直道といい、蚊狂子・得序齊・白馬軒と号す。郡中在。八十一歳没。

このほか、名のみ伝わった俳友には、波凌・帯橋・雨琴・金翠・無来・羊求・涼宇・樗露・涼雨・蛙庵不二・雷主・一來・虚堂・花笛・字好がある。曾我部松亭氏によれば、樗堂・冬陽はあまり親しくなかった由であるが、残されたものには樗堂のものも多い。

さらに、詩文、美術の師友としては、

(1) 吉田蔵沢 (一七二二一八〇二) 松山藩士、郡奉行、久太夫といい、名を良香、諱は子馨、翠蘭・翠桃館・不二翁・

白雪・一馬と号す。墨竹画の名手。八十二歳没。

(2) 明月曇寧 (一七二七一七九六) 周防国出身、円光寺住職、明逸・義道・丘南・円光寺隠居と号す。名書家、『抹茶樹伝』著者。七十一歳没。

(3) 宇佐美淡斎 (一七四九一八一六) 松山藩士、町奉行。頼兵衛と称し、名は正平、諱は子衡、正松・長夫・長松軒と号す。詩文に長ず。六十八歳没。

(4) 徳成僧立 (一七六四一八一〇) 明月の子、円光寺住職。のち京都に講ず。信児・秀成と号す。『俱舍論』著者。四十歳没。

(5) 蔵山宗賛 (一七二二一七八八) 貴謙、贖禪、吸江、大響翁、西山散木子、天徳寺住。

(6) 千宗室 (一七四二一八〇二) 裏千家九世、石翁・不見齊・寒雲亭と号す。松山藩茶道師範。五十八歳没。

(7) 曾我部一貴 (一七六一一八一六) 与一左衛門則致、孟功・正積・鮑休庵。歌人、茶俳人。

このように、多くの友人知己がいた。なお、このほかに、伝えられた懐紙には、雪帚・南山楼・廬之坊・巴山などがあるが、詳しくわからない。

六 終焉

松山の文芸、経済界で活躍していた魚文に、ある日、突然の死が訪れた。従来、その死因は不明であったが、今回の資料の中に、次の香語(原漢文)が見つかった。その全文(読み下し)

を掲げてみる。

案ずるに、夫れ、菩提峰も速きに非ず、僛止して、心急に在り、涅槃の岸を得るも、近く到る。遂に福を衆善に酬ゆる者也。爰に百濟氏、名は方猷、字は伯図、今は以て宗榮と称す。

其生、質朴にして多芸也。少かりし時、和楽、撃鼓、漢曲、横笛を吹き、鼓を撃つ、風流の道、滑芸を事として、而して、蕉翁の流を掬し、喫茶を好みて、千家の門に遊ぶ。免れて服色富み、財は府に満ちて、唐人街の豪商となる。故に少くして街長と為る。新年毎に□に到る。

邦君、城に在れば、見えて流盃を載く。又大州候に見えて、府庫の足らざるを助く。

従来、多病にして、五十何歳にして家を大某に譲る。其次男女、猶氏族□し、別業を営みて、屋後に隠る、招隠室と曰う、濁り是れ居を安んずるのみ、山居を求めて世人を避くるには非ざる也。其徳の大体を曰うこと云々。時なる哉、命なる哉、茲に年甲子（文化元年）の冬、十月二十有五日夜、茶会の帰路、俄に疾を得て、泊上に卒す。是れ、常に其道を好む之至れるか。

天瑞快春 香を焚き誌す

この天瑞快春は、多分菩提寺観音寺の住僧ではないかと思われるが、しかとわからない。魚文は酒を好んだようで、腦溢血のような状態であったと思われる。このあと、百濟家は経済的

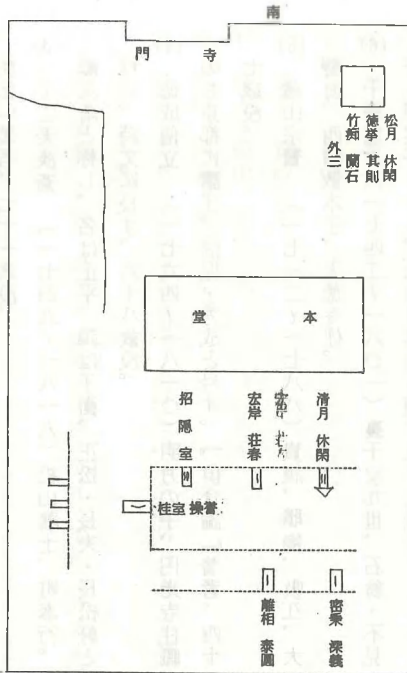
なかけりを見せるようである。

七 墓所

魚文は、死後、観音寺（現在三番町二丁目）に葬られた。この墓所は、終戦後間もなく整理せられ、現在は常信寺に移されているが、魚文の墓碑は不明である。ところが、今回の資料のなかから、武知方載の記した「武知氏年忌見出表墳墓所在地概況図」が見つかった。

図3参照

図3 武知氏観音寺墓所図



武智五郎造

これによると、観音寺本堂の裏、西側より東へ、初代、二代に続き「招隠室」の碑銘で魚文の墓があったことが明らかであ

る。おそらく、移転の折、整理されたものと思われ、今更ながら残念である。

なお、常信寺の墓地図を図4として載せる。

図4 常信寺武知家墓所

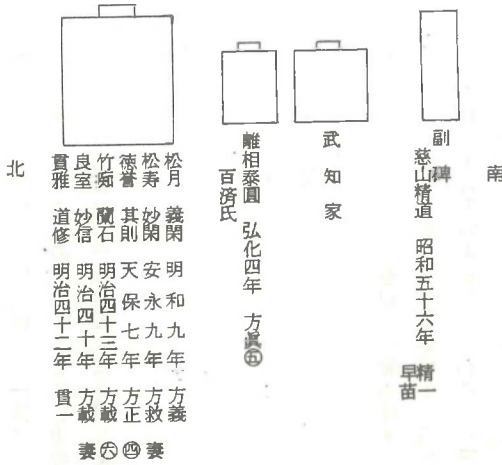
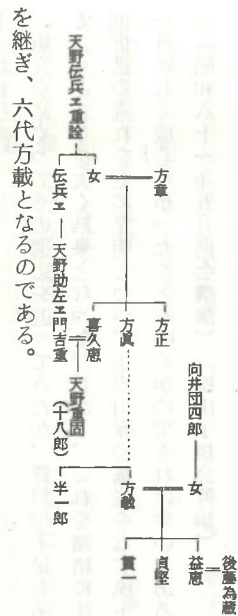


図5



を継ぎ、六代方載となるのである。

方載は、字を子親、五郎造と称し、茶五郎ともいい、蘭石・竹痴・愛楓居・愛蘭居・鶴山人・竹雨・争雁・娛老館の号があり、茶は裏千家十一世玄々斎(宗室虚白堂、明治十年没)の内弟子となり、宗長と号し奥儀を究めた。また、漢詩及び書を黒田露谷・城長州・日下伯巖に学び、堀田匡平・小池牧太を友として、権勢を求めず、小学校教師や、銀行に勤め、博学多識を内に蔵して世を終わった。曾我部松亭氏は、晩年の方載から、一茶ほかの短冊を貰い、古事を訊ねている。方載の師友の略伝を左記しておく。

- (1) 黒田鷲谷 (一八七二) 亀屋捨助、呂国・琴翁・方壺と号し、漢学・俳諧・茶道に長ず。札の辻に古井庵をもつ。
- (2) 城長洲 (一八〇三〜一八六六) 字は晋、諱は康郷、隆平と称し、政堂・萃脩道人と号す。三津浜の医師、漢詩に長ず。
- (3) 日下伯巖 (一七八五〜一八六六) 松山藩士、字は梁、宗八と称し、陶溪と号す。明教館教授。八十二歳没。
- (4) 堀田匡平 (一八二四〜一八八三) 興居嶋里正。寛左衛門、

八 系累

魚文の妻は、図5の略系のように、三津浜の町大年寄を松平定行入国以来続けた天野助左衛門重詮の女である。天野家とこれから重縁となる、魚文の女、喜久恵は、伝兵衛吉重に嫁し、助左衛門重固(十八郎、号、訥斎、以静庵主、茶道に長じ『茶会記』五巻を残した)を生み、重固の子、朔太郎は絶家した茶屋

伸八と称し、諱は知郷、桑崖・松蔭・九華・着雲と号す。勤王志士、詩歌人。六十歳没。

(5) 小池牧太 (生没年不詳) 曉雨・群芳園と号す。詩俳人。九 三尊画幅ほか

魚文が所持した、蕉風三尊画賛幅は、元禄五年に、久松爾山が、狩野探雪に琴と太鼓と笙を書かせ、それに芭蕉・素堂・其角に賛を求めたもので、竹阿から伝え聞いた一茶は、それを寛政八年一月十五日拜して、魚文の求めに応じて二通の添状を書いている。その一には、其角が『末若葉』にあげた文を書き、そのあとに、

其角うち若葉にあり

同 五元集にあり

素堂説叢大全にもあり

是は三対幅の配り違あり

と注意し、その二には、

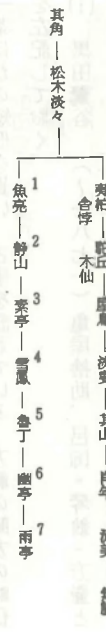
玉橋二名の島に往ませる六六亭は、亡師も休もりたまひし家にしあれば、やつがれもこたび筑紫のかへるさ、訪ひ侍りきに、こや鳥が鳴吾妻ゆもききつたわりたる三軸のありて、とミにおろがミたいまつるは、あがねぎごとのととなへる日にぞありける。

正風の三尊見たり梅の宿

右東都墨水散人 一茶華押

この幅について、曾我部松亭氏は、魚文の家から転々としたのち、重見番五郎氏の有となり、その後、土居剛吉郎氏の所持するところと記されている。土居氏の父は、通夫といい、保太郎・彦六時代は維新の志士、のち大阪商業会議所会頭として活躍したが、花の本芹舎に学んで、宇腸・無腸と号し、図6の俳

図6



系を継いで、八千房八世となった人である。奇しくも三尊幅がこの家に伝わったとすれば、伊予につながる縁と言えようか、現在はどうなったか知る由もない。

また、明月が書いた『青眼室記』は戦災で烏有に帰し、『孔雀楼記』、『六六亭記』の二記は県外に流出したと聞か、幸いに明月より魚文宛の書状は、武知精一氏より、新野斜村氏へ譲られ、二十数通を屏風仕立にして現在に伝えられている。

十 おわりに

魚文をめぐるその週辺を追ってみたが、資料の不足もあって、まとまりを欠く結果となった。しかし、これを端緒に江戸期俳諧の流れを更に究明しつつ、子規山脈の基底をなす風土が一日にして成らなかつたことを明らかにできれば幸いである。

(昭和六十一年五月例会講演) (松山子規会幹事)

猷 詠 第八十五回子規忌

萩活けて一人静かに子規祀る

秋拾道明組紐締めば鳴り

獺祭忌簾に透ける長米瓜

獺祭忌併聖慕ふ集いかな

子規堂の庭に萩咲き獺祭忌

松山人口四国一とや獺祭忌

八十翁九十翁こぞり子規祀る

忌を前にただ一人訪ふ萩の寺

句を習ひ初めて参ず米瓜の忌

米寿得て学ぶことあり獺祭忌

萩の紅こぼるる雨の獺祭忌

辞書引いて文字親しや獺祭忌

外つ国も俳句の波の獺祭忌

獺祭忌句碑の白萩咲き初めて

あな尊と高齢會長子規祀る

古里の人に祀られ今日子規忌

集ひ来て句碑読み返す獺祭忌

白萩の咲く頃となり獺祭忌

秋山 操子

石丸 律子

泉 美智子

岩田 美歩

宇都宮松子

宇野つや女

大沢洲曉子

奥村 藤女

同

片山 月石

菅 君女

木戸 一子

久野 隆代

古茂田文字

重松 虚舟

重松 久女

同

島崎 年和

恙なく子規忌にはべり萩の寺

秋灯下子規散策集ひもどきて

子規生誕百二十年獺祭忌

子規忌にと植ゑし米瓜のよく伸びし

偉大なる横顔永久に獺祭忌

今切りし白菊供華とす子規忌哉

獺祭忌近づく鶏頭緋と炎ゆる

子規遠忌大小米瓜子規の寺

峠とは淋しきものよ葛の花

生誕は百二十年子規祭る

晩学の句の道遠し獺祭忌

獺祭忌明治の時代よみがえる

爽かや子規博を出て句碑に立つ

獺祭忌ぬかづくほどに遺徳なほ

秋雨に読経しめやか子規祀る

子規堂に在りし日偲ぶ子規忌かな

外国へ句のひろがりし獺祭忌

お供への米瓜のことを尋ねられ

駄句捨てて残るものなし子規まつる

主治医やさし子規忌の雨を気づかはれ

清水 華子

同

橘 里風

同

田中 幸子

玉井多佳子

同

玉乃井和子

長曾我部一総

筒井 梨栄

中川八重子

浪川 悠子

同

西山 草丘

同

平松 好乃

藤原 十重

二神 ヒサ

光藤小枝子

村上 和鴻

(P 22 へつづく)

編集の窓

著作

評伝正岡子規(岩波文庫) 柴田宵曲 岩波書店 昭和六一年

六月 三三三P 五〇〇円

正岡子規の短歌 泉 寔 著者発行 昭和六一年七月 一一九

P 非売品

論文

アララギの茂る家―藤真と藤檀堂兄弟― 藤玲子 「子規博だより」昭和六一年六月

より

子規と房総―四海道市と子規句碑― 和田茂樹 「子規博だより」昭和六一年六月

り

長塚節の新資料(伊藤左千夫・藤檀堂宛長塚節書簡) 大戸三

千枝 「子規博だより」昭和六一年六月

碧梧桐「三千里」の旅(伊豆・箱根) 栗田靖 「子規博だより」昭和六一年六月

り

ほととぎす考 その言葉と文学 小泉道 「子規博だより」昭和六一年六月

博だより

子規とその家系(一)(正岡家と城下町松山3) 森正経 「子規博だより」昭和六一年六月

博だより

子規と芭蕉・蕪村 石原誠 「子規博だより」昭和六一年六月

「ホトトギス」を読む(一)(二) 坪内稔典 「園田国文」第七号(一)

昭和六一年三月)、「園田語文」創刊号(昭和六一年七月)

療養中の子規と鳴雪(一)(二)(鳴雪と子規4748) 和田茂樹 「星」

昭和六一年七月、八月、

病床の子規と鳴雪(一)(鳴雪と子規49) 和田茂樹 「星」昭和

六一年九月

新刊

松山子規会叢書 18

山 菜 莢 菊池耕子楼句集

著 者 故 菊 池 尹 男

編集・発行 松 山 子 規 会

二四一P 非売品

ご希望の方は、

松山市岩崎町二丁目四―二二

渡部満泰までお申込み下さい。

子規会誌 三二一号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 昭和六十一年十月十九日

発行 松 山 子 規 会

松山市末広町正宗寺内

郵便振替徳島二―一八六八

印刷所 青 柳 堂

松山市東長戸二丁目一三九

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

巴 堂 本 店

TEL 0899 (41) 3452

ホテル春日園で挙式を

人生のスタートを春日園は華やかに
厳かに演出いたします。

政府登録国際観光旅館

春 日 園

ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1

☎(0899)41-9156



お食事処…かすが…

石畳、格子戸、木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお

自費出版のご用命を…

企画・編集その他自費出版についてのご相談に応じます。
お気軽にお立寄りください。

AOBA

————— 図書出版・一般印刷 —————

松山市小栗6丁目3-23 (有)青葉図書 ☎(0899)43-1165(代)

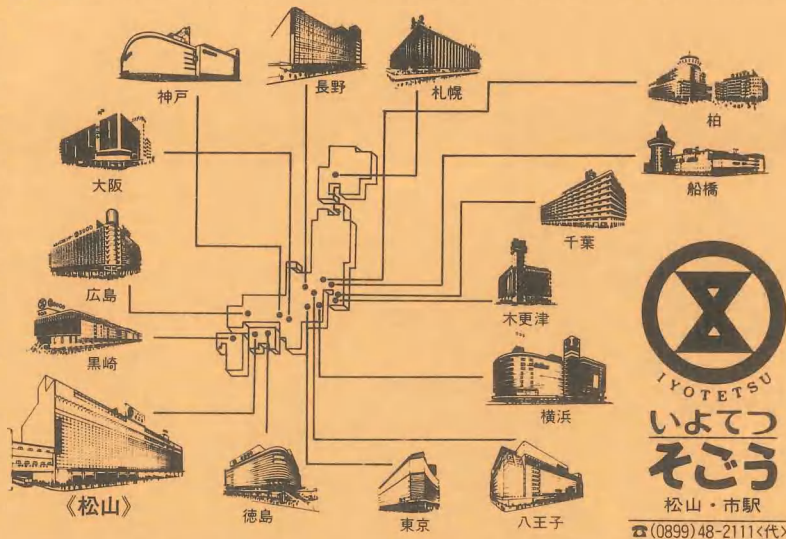
お買物の楽しさを贈る いよてつそごうの商品券

■いよてつそごうの支店・出張所
そごうグループ各店でご利用
いただけます。



■500円～100,000円
まで10種類ございます
ご予算に応じてセットさせ
ていただきます

北海道から九州まで全国に広がるそごうグループ



お近くの支店・出張所もお気軽にご利用くださいませ

高知支店・宿毛出張所・サンパル出張所・宇和島支店・八幡浜支店・宇和出張所
 ☆(0898)73-1177 ☆(08806)3-4682 ☆(0895)72-5654 ☆(0895)23-0022 ☆(0894)23-1001 ☆(0894)62-5258
 大洲出張所・今治出張所・東予出張所・新居浜出張所・伊予三島出張所
 ☆(08932)3-5255 ☆(0898)31-0240 ☆(08956)5-4385 ☆(0897)33-9732 ☆(0896)24-4612

¥ 300